阿知波五郎論文集『近代医史学論考』

今は亡き阿知波博士の旧著を集めた表題の本が今度京都の思文閣出版から発行された。思えば博士が逝かれてから今年で三年の歳月が過ぎてしまった。畏友阿知波先生が京大病院で死去されてからもう三年も経つのに今、つくづくと実感する。

博士の医史学関係の著書でこれまで刊行されたものは何冊かあるが、それらのものは多くの人々に少なからぬ恩恵を与え、とりわけ私に対しては、博士独自の文章に強く心ひかれ、その研究態度に心打たれたからである。このことが博士の真摯な人柄と相俟って此上なき印象を私の心中に刻んだ。

「近代医史学論考」に収められている珠玉の各編に対しては宗田一氏の的確な、公正無比な評言が下巻の終りに附せられてあり、私如き者の言辞を要しないのであるが、求められるまま、私と博士の間柄を中心に、二、三の見解を述べてみたい。

私と博士との交際が始まったのはそんなに古いことではなく、医史学上の研究に関連したものであった。十数年前、博士が東京の医学上の史跡を見学する為に上京された時に、博士と親しく接してからその学識、人柄に此上なく魅せられてから、博士と私との距離は急速に縮まった。

中でも昭和四十四年に私の生れ故郷のオランダへの旅行にはからずも博士とご一緒し、博士の言動に直かに触れたことは、私に決定的な影響を及ぼしたのである。特にライデンに一週間程滞在した間に博士と同室で過した生活は、博士の学問に接する考え方を具現したものとして、抜きさしならないものを私に与えたことは確かである。

特にブールハーベに対する博士の入れ込みようは真実非常なもので、「近代医史学論考」中に明示されている如くで、ブールハーベが日本の医学の発展に大きく関係していることを強調されている。またこれはあくまで私の想像であるが、医史学者として令名がある三木栄博士もまた博士の長逝を痛根の至りと思われているのではあるまいか。

三木博士は「朝鮮医学史」を始め、医史学関係の重要な著作がいくつかあるが、それらは阿知波博士からの影響が少なくないと思われる。かつて三木博士が私に「阿知波先生と私との間の書信のやりとりは、まるで恋人同志が行なっているようなものだよ…」言われたことがあったが、まさに両先生の間柄の真実を伝えているものと言えよう。

いささか的外れ気味の駄文になってしまった観があるが、私の意とする所を少しでも汲んで頂けたらと思う。

（大鳥蘭三郎）

〔思文閣出版　定価六、〇〇〇円〕

立川昭二著『明治医事往来』

どこから読んでも、何回読んでも面白い本である。この面白さはただ単に知的好奇心を満たしてくれるというのではなく、人間の生命・生活の営みがすみずみまで紹介されているので、その喜怒哀楽の絵模様がまた面白く、かつまた愛しく哀しいのである。

筆者の人間讃歌をベースとした筆致に、共鳴したり反発したりしつつ、医療と人間のかかわりを、いろいろの視点からしっかり考えさせられた。

プロローグにはじまって、全編十一にわけられている。各章毎にタイトルはつけられていないのであるが、私なりにつけてみると、一、健康　二、伝染病　三、医師　四、医学生・医は仁術　五、女性・看護婦・産婆　六、誕生から死　七、入院と家族　八、五大疾患　九、業病の処遇・売薬　十、マスコミにみる医学　十一、時代の狂気となるのであろうか。各章、各節、なじみの深い文学作品が沢山でてくるし、ジョルジュ・ビゴー、竹久夢二のさし絵、写真類が豊富に随所に挿入されているのも楽しい。明治時代を知らぬ者にもその時代の人間模様や、風俗・風習が容易にイメージできる。

明治は遠くなりにけりというが、この本を読んでみてまだまだ近いと感じたのは、私が杏雲堂病院病棟跡地に住み、南湖院も近いせいばかりではない。日本人の病気に対する受けとめかたや、病人の観かたや接しかたについては、本質なところでは現在もあまり変っていない部分を多く感じた。

がしかし、医学の進歩についてはその急速な発展ぶりに目を見張り、医学者の研鑽努力に対して改めて敬意の念を抱いた。

病気は人間の影の部分、弱い部分であり、人々は隠す努力をし晴がましく堂々と記録に残すことは少いし、日本人の習性として厭なことは早く忘れようとする。そのような状況の中でよくこれだけの事実を!!と感嘆しつつ読んだ。

ペスト・コレラ・赤痢・ライなどは、現在では極くまれな伝染性疾患となったが、また新たな伝染性疾患も生じている。学問としての医学ではなく、人間の幸せのための医学の発展を願うならば、このような世相に現点をあてて書かれた書物は貴重なものではあるまいか。

プロローグでは、外人の目に映った日本人（ビゴー描く日本人）を見てショックなのは外人ではなく、むしろ日本人のほうかもしれない。エピローグで、「東京は病人の捨場所」「小さな清潔から大きな不潔」「いのち短かし……」は現在でも同じじゃないかと思う。

最後に、日本最初のライ患者収容所は明治二十年御殿場の民家と二九八頁に述べられているが、日本最初のライ患者収容所は、奈良の北山十八間戸ではないのか、ご教示願えれば幸いである。

久し振りに興味津々で読んだ本である。

（山根信子）

〔新潮社　一九八六年　定価一、五〇〇円〕

森　納著『因伯厠考』

『因伯厠考』は、鳥取市に隣接する地区で開業のかたわら、さまざまな角度から地方医史の研究に取組み、『因伯の医師たち』『因伯杏林碑誌集成』『因伯くすり雑考』（一）（二）『因伯医史雑話』など、つぎつぎに多くの単行書を世に送ってこられた著者の近業をまとめたもので、衛生学的・民俗学的見地からの観察調査が貫かれている。この方面の内外の著作は、風俗史的なものが多く、中には衛生工学的発想の大著なども散見するが、この著者のような立場のものは、海外も含めて類書が少ないのではなかろうか。

全体の構成は、便所の歴史概略、その名称、糞尿処理、屋敷内での位置、構造・材質、照明と便器、用便の姿勢、便所の変遷、尻拭き用具、便所と草や木、便所神、大小便及び便所に関する俚諺などの章となっており、特筆すべき点は実地調査に基づく間取り図や写真が多数配されていることである。

記述はこのように多岐にわたっているが、索引のない欠点を、各ページの上部に小見出し代わりに挙げられた主要項目・用語名がかなりのところまで補って、前後の参照や検索に役立っている。

本書の内容の根幹部分も、題名として標榜するところも、あくまで地方的であるが、寄生虫卵の検索結果の推移が述べられる一方で、現在の近代的トイレがただ狭い範囲の清潔だけに意を用いている弊を指摘して、生態系との調和を考慮すべきだとするなどの提言もなされており、その含蓄するところはかならずしも「地方的」に止まらぬものがあると言えよう。

巻末の「まとめ」の中で、著者は「……敗戦後、農地解放による改革、農業経営の振興、発展にともなって肥え溜めとしての便所から住居の一部分としての位置付け、衛生的意識向上、化学肥料への変化などに伴って便所への感覚の変化からその改良が行われた。便所の調査で困難したのは便所の数、便所壺の大小、上便所の有無などである。それによって農家の経営状態すなわち貧富の差が判断できることであった。そこに農家の調査に対するためらいがあったのである。」と述べている。しかし、こうした事情にもかかわらず、本書の末尾には十五ページにわたって、著者が調査した県下一円約三六〇件に上る世帯の便所の、明治・大正期以前の材料・構造、体を支える綱・木の有無、屋敷内の所在、植木（ナンテン、柿など）、近年の改良とその材料・構造、所在、汲取り方式、浄化層・小便所併置の有無などが一覧表として添えられ、一偉観を呈している。

ちなみに、著者の本領はこのような時間と労力を惜しまぬ徹底した現地取材・調査による構築にあるが、こと本書に関しては、李家正文氏はじめ古今の文献を渉猟引用して、一般の通読に堪えるものとしている。また、幕末の鳥取藩では、著者の開業する国府町で糞尿を原料にして人工の硝石を造る原理の火薬製造工場を設けていたなどの興味深い事実も紹介されている。「トイレとその今昔」という副題を持ち、A5判約一五〇ページ、落着いて好もしい装丁に包まれた本書の奥付に、この著者のものとしてはめ

ずらしく、「頒価八〇〇円」の文字が読まれるゆえんでもあろう。

（三輪卓爾）

〔A5判　一五〇頁　頒価八〇〇円〕

川田洋一著『仏教医学物語』（上）・（下）

「仏教医学物語」には、仏教の医学・心理学・哲学・治療医学などが懇切にかかれている。小型の文庫本で上下二冊だが内容は幅が広い。仏教の予備知識がないと、読み切れないかもしれないが、物語りが軸になっているから、読み下だすと常識的に解かるようにできている。主な登場人物は、釈尊を中心として、耆婆・竜樹・持水と流水・阿闍世・提婆達多である。

第一にでてくる耆婆は、釈尊在世時の有名な医師である。多分に伝説的なところもあるが、扱った病症例が十例ほど詳細に報告される。釈尊も、けがや下痢で耆婆の治療を受けている。

次の竜樹は、釈尊滅後七百年のひとで、「大智度論」を草し大乗仏教の基をひらいた。若いときの乱行から後世の大成までが描かれている。彼は「よく一相を解し、無生の二忍へ」豁然として通達した。それが無量寿経・法華経などの教理に波及している。

次の持水と流水は、金光明最勝王経にあり、長者の家系で医をよくする。持水が一子の流水に医を教えて、身病の四大不調とは四季に変化するもので、四季に適応する夫々の薬用のあることが説かれる。また、流水の慈悲には、その二子の水満と水蔵とに大池の渇水を防がせて、魚類を死滅から救出させる。経典は既に大乗に属している。この二子は、ただの若者ではなく、実は銀憧菩薩と銀光菩薩とであったと経典は告げる。これは経典にはよくある手法である。

阿闍世と提婆の物語りは、仏教産科学として下巻の大半を占める。先ず出世前の中有から説き起こし、十誦律・増壱阿含・宝積経・涅槃経の記述をひく。阿闍世は王子でありながら、王位の掠奪を提婆達多から唆かされた。それで父王を幽閉して死に近づかしめ、母なる王妃の必死の救出行為にさえも激怒してこれを殺そうと計かる。そうした非道な心のなかの葛藤が仏教心理で述べられる。唯識論の未那識・阿頼耶識の理解が必要である。結局、阿闍世は釈尊の大光明で月愛三昧に救われ、彼の発した悪瘡も治癒し涅槃の境地に安住できる。諸悪の誘因をなす提婆達多の心理も漏れることなく記載される。

だいたい「物語」の本は、物語りを並べたてて、カタローギングの形式になることが多い。本書はそれを巧みに避けて、教理と物語とをうまく嚙み合せている。だから読み下してもけっこう面白いし、仏教の予備知識があればもっと面白い。

仏教の知識というものは難かしい。難かしいといっても、解説本などをうまくえらんで四～五冊読めば少しは違ってくる。とは云っても、数百冊読んでも必らず理解がつくとは限らない。竜樹のところで仏教倫理がのべられているが、受け方が悪いと焼石に水である。

予備知識の早手廻しは無いでもない。川田氏が昭和三十七年に

かかれた、同じ第三文明社の「仏教と医学」を読むことだ。これは稀代の名著である。二十五年たってまだ八版だが、勉強家が十倍いたら三〇〇版にでもなっていた筈。

細かいことだが本書には、流水の二人のこどもが、実は銀憧菩薩と銀光菩薩だったというパターンがある。この「実ハ」が実は日本の歌舞伎芝居に受け継がれている。たとえば幕切れの近くで、主役が「われは実ハ、曽我の五郎時致なるぞ」と威張って引き抜く。引き抜くとは役者が芝居のなかで、急に今までの衣装から派手な衣装に引き抜いて変って見せる技法である。これは面白い。とにかく仏教は幅が広くて面白い。

（S生）

〔レグルス文庫　第三文明社　新書版　上・一八二頁　下・二〇〇頁　一九八七年　定価各　五八〇円〕

山田慶児編『新発現中国科学資料の研究』（訳注篇）・（論考篇）

山田慶児氏を主幹とする京都大学人文科学研究所の「新発現科学史料の研究」班の研究報告書である。研究期間は一九七七年度から一九八一年度に至る五年間。参加した共同研究者は、赤堀昭（塩野義製薬研究所：この所属は当時のもの。以下同）、故天野元之助・海野一隆（大阪大学）、勝村哲也（京都大学人文科学研究所）、川原秀城（京都大学大学院）、坂出祥伸（関西大学）、故篠田統・杉村邦彦（三重大学）、田中淡（京都大学人文科学研究所）、中嶋隆蔵（東北大学）、橋本敬造（関西大学）、宮島一彦（同志社大学）、村上嘉実・森村謙一（茨木高校）、山本徳子（大阪大学）の諸氏である。

『訳注篇』の研究対象は、一九七三年に中国湖南省長沙の馬王堆三号漢墓から出土した帛書・竹（木）簡を中心とし、これにいくつかの医簡・刻碑を含めた文献計一二種を収録している。このうち一〇種が医薬に関するものである。すなわち、

「足臂十一脈灸経」（赤堀）
「陰陽十一脈灸経」（赤堀）
「脈法」（坂出・山田）
「陰陽脈死候」（坂出・山田）
「五十二病方」（赤堀・山田）
「却穀食気篇」（坂出・中嶋・山田）
「養生方」（麦谷邦夫）

以上馬王堆医書

「武威漢代医簡」（赤堀・山田）
「流沙墜簡と居延漢簡の医方簡」（赤堀）
「龍門石窟薬方碑文」（勝村）

がそれである（括弧内は主担当者）。

『論考篇』は三部から成り、Ⅰ部には主として馬王堆医書とそれに関連する資料を論じた文章が、Ⅱ部には馬王堆以外の新出土資料を分析し、もしくはその知見に基づいて既存の資料を新たな角度から照明した文章が、Ⅲ部には明清期の近代科学にかかわる論文が収録されている。それぞれ四・五・二の計一一の論文が収め

られるが、そのうち医薬学史に関するものは次の七論文である。

山田慶児「鍼灸と湯液の起源—古代医学形成の二つの位相」
赤堀　昭「治法をめぐる問題」
村上嘉実「五十二病方の人部薬」
山田慶児「馬王堆漢墓出土医書三則」

以上Ⅰ部収録

桜井謙介「新出土医薬関係文物について」
森村謙一「中国古代の有用自然物—その産地分布と原本草体系の推察」
坂出祥伸「彭祖伝説と『彭祖経』」

以上Ⅱ部収録

いずれも意欲的大作である。

これらの二書は非売品で、一般の人々の入手は容易ではないが、この分野に関心をもたれる方には、図書館を利用して一読されることをお薦めしたい。

（小曽戸　洋）

〔京都大学人文科学研究所　一九八五年　訳注篇・四五五頁　論考篇・六〇四頁　非売品〕

大鳥蘭三郎著『医学書誌論考』

本書はわれわれの敬愛する日本医史学会理事長で、元慶応義塾大学教授大鳥蘭三郎先生が、すでに発表された医学史の論文六編、すなわち、一、日本外科史稿、二、杉田玄白未刊随筆本三種、三、「鶴斎遺稿」について、四、「瘍医新書」の研究、五、「遠西医範」と「医範提綱」、六、箕作阮甫の「外科必読」を一冊にまとめて出版したもので、「日本外科史稿」以外の論文は、すべて書誌学的研究に基づいたものである。

日本外科史稿は、日本の外科は、丹波康頼撰「医心方」（九八四年）に創始されたことから説き、南蛮流外科、オランダ外科と筆を進め、杉田玄白、大槻玄沢らにより翻訳、刊行された「瘍医新書」にまで及んでいる。この時代の外科を概観するに好適の論文である。

杉田玄白の未刊の随筆三種とは「耄耋独語」、「玉味噌」「鶴斎遺稿歌之一」で、「耄耋独語」では玄白が老いのつらさを告白しており、「玉味噌」では蘭学に志し成功した経過を述べている内容を簡明に紹介している。全文が活字として紹介されるのを希望するのは私だけではないであろう。「歌之一」は次の「鶴斎遺稿」に詳述してある。

この「鶴斎遺稿」は玄白が詠んだ詩や和歌をあつめたもので、このうち「詩之二」にのせられている詩が作られた年月、動機などについて、玄白の「日録」と対比して考証している。勿論登場人物その他について不明のものもあり、今後の考証が待たれる。「歌之一」では、文化三年（一八〇六）から四年に詠まれた和歌四四三首が列記されている。医事の余暇、自然の風物に眼を向けた玄白の心情が偲ばれる。

「瘍医新書」の研究は、玄白から大槻玄沢に引き継がれたハイ

ステル著の外科学書の翻訳書「瘍医新書」の成立経緯および内容について簡潔に解説してあり、先生のオランダ語についての造詣の深さを示している。玄白がこの訳業を開始した頃の写本「瘍科新書」三冊が岡山大学図書館鹿田分館にあり、かつて私が蘭研大会で報告（蘭研報告二五一号　昭四六　杉田玄白研究補遺）したが、先生の解説を補うものであろう。

「遠西医範」と「医範提綱」は、宇田川榛斎が刊行した「医範提綱」の基となった「遠西医範」の残欠本を求め、その所在を確認して、内容を紹介し、そのうち東北大本の肺篇、膜・胸腺篇は榛斎の自筆本と鑑定しておられる。これらの写本について一々実見され解説しておられるので、遠西医範の研究者にとって貴重な道しるべである。

箕作阮甫と「外科必読」、この訳書の原著者は不明とのことであるが、訳出された外科用語と現在用いられている外科用語をラテン語の読み方から比較している。これは先生のお得意の分野であるが、医学史研究者にとって甚だ便利である。

日本に現存する蘭方医学系の刊本、未刊本を個人がすべて入手し、研究することは難しい。この書物のように書誌学的考証と内容紹介が多くなされることは、この方面の研究者にとって有益であり、今後ますますこのような地道な研究の発展を期待したい。

（中山　沃）

〔思文閣出版　一九八七年　二一二頁　四、八〇〇円〕

小曽戸丈夫著『意釈黄帝内経太素』第一巻～三巻

医疾令以来、我が国の医師たちは、素問霊枢を読んで医学を勉強してきた。所が、徳川の中期に至って、素問霊枢は分からない、と云い出した。此の頃から注釈書が出始める。第一次の注釈書ブームは幕末に起こった。江戸医学館の俊秀たちの業績が一時に花開いた時である。漢方の冬の時代にぶつかって、実を結ぶことなく萎んでしまった。第二次のブームは戦後に始まる。丸山氏の校勘和訓、小曽戸氏の意釈、柴崎氏の大系と長年苦心経営の成果が踵を接して現れた。今回の意釈太素も其の一環に属するものである。

太素は素問霊枢の別伝のテキストである。日本では、素霊の校勘、注釈に利用されてきたが、太素自体の注釈はこれまでにない。此の意釈太素が本邦最初の翻訳であり、注釈である。

小曽戸氏は意釈素問以来、精力的に漢方医薬古典シリーズを刊行してこられたが、今回の本は、此の蓄積された古典読解のノウハウを縦横に駆使して挙げられた成果であろうと思われる。内容、形式ともに、従来のものと違う。

先ず、装丁が違う。重厚である。しかも、ブルーの布装の感触は暖かい。金箔の書名も落ちついた明るさがある。古い典籍の、新たなる衣装をまとっての登場にふさわしい。

文字は大きくはないが、行間は充分にとってある。読み易い。本書は太素を読む時のノート代わりに使うべき本だと思うが、余

白が多く、書き入れも自由に出来るのがよい。

翻訳にあたって、原文の文字を総て使った。これがよかった。意釈素問や霊枢は完全な現代語訳である。素霊の原文の痕跡は何処にもない。この翻訳は本当に正確なんだろうか。それが分からない、という不安があった。今度はそれが分かる。材料を全部展示して、それをどう組み立てて、この翻訳を作ったか、分かるようになっている。今様和訓も成功した。相当奔放な訳語を採用しているが、違和感はない。寧ろ、うまいなあと感心するような場合が多い。そして、一つの訳語が、どのような現場から作り出され、どのような意味の広がりを持っているか、良く分かる。これによって、太素の原文を、可成りの正確さをもって、現代日本語で読むことが出来る。これはすばらしいことだ。

太素は楊上善が撰注したテキストである。本書は此の楊氏の注釈を全訳してある。訳者の言葉を借りれば、楊教授のゼミナールで太素の講読を聞くように、即ち楊注に全面的に依拠して、太素を訳した。これは本書を読み易く理解しやすくした。同時に、楊氏が読みそこなった所は、本書もそのまま受けつぐことになる。これはやはりこまる。

この問題に対応する為にも、又今様和訓だけでは今一つ分かりにくいという言葉の補註の為にも、訳者の注釈はもう少し詳細にした方がよかったかもしれない。

日本人は、古くから中国医学を輸入して民生日常の用に供してきた。併し、どうも、役に立つことばかり選り好みして拾い上げてきたようである。これで中国医学の本質が分かるのだろうか。太素は読んですぐ役に立つ本ではないが、中国医学の根幹が記されている。今、従来の水準を超えた読みやすい案内書が現われた。一本を備えて、中国医学の本来の姿について再検討してみては如何であろうか。

（家本誠一）

〔築地書館　一九八七年　総一〇〇八頁
揃三冊　定価六四、〇〇〇円〕

杉本つとむ著『解体新書の時代』

早稲田の文学部教授杉本つとむ先生は蘭研会員であり、夙に蘭学時代の数冊の大著作があって蘭語学の語学を根底にして史的考察が入るので、私は先生の著作を読んでいると、屢々大槻玄沢と杉本先生の尊顔が交錯して、本に喰い入る両者の真剣な眼な差しが浮かぶ。

元寇の役に敗れて以来中国は、明、清の時代を経ても依然沿岸を封鎖して貿易を閉ざしてきたので、ヴァスコダガマの東洋航路発見に伴う西洋文明との接触に立ち遅れ、眠れる獅子は遂に阿片戦争の鞭で叩かれた。

一方、日本では明国の鎖国の為に、室町幕府は貿易による共存互栄を阻まれてジリ貧となり、物資は窮乏し枯淡を愛する耐乏の世となり、僅かの勘合符と南蛮貿易で自活した。

この貧相日本を救わんと、秀吉は明国に開港を求めたが断わら

れたので、朝鮮から明国に侵攻を企て、家康は三浦按針から得た智慧で安南、シャム、ルソン等に海外雄飛、貿易発展を企てた。

即ち信長、秀吉、家康の時代にはスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリスとの接触で急速に西洋文明をとり、占星術（テンモンガク）、数学、航海術、銃砲学が興って西洋文明の華が咲いたが、他方ローマ法王庁繁栄の手段としての領土占領を求める切支丹（カソリック）が入り、為に、家康は海外貿易の利よりも自国の安全策鎖国をとり、島原の乱を機に家光から完全鎖国に入った。ここに清国と異り、一時期とはいえ西洋と開港をした為に、日本国の底流には西洋学問崇拝の新鮮な好学心が拡がってきた。

尚、完全鎖国とは言いながら、唯一長崎を開港して清国と阿蘭陀国と貿易をして、細々と西洋文明を採り、手段として通詞を養成したので、通詞を媒介して細々と学問が入った。

新井白石のシドッチ訊問による『西洋紀聞』が鎖国の狭量に警醒を促したので、青木昆陽とオランダ文法研究、野呂元丈と西洋博物書、山路之徽と『和蘭緒言』（地理学）、平賀源内と電気学（エレキテル）、前野良沢や吉雄耕牛（日本で初めてオランダ語・ドイツ語・ラテン語を読んだ人）が背景にに出没して、前ルネッサンスのエネルギーが蓄積されてきた。

西洋の実証主義に促されて、やる気満々になった医学界には山脇東洋と河口信任が踴り出て、人体解剖と著述書で、西洋の書は実であり、古来の東洋の書は虚である事を喝破した。杉田玄白は東洋、信任の壮挙に感激して『解体新書』を著した。

玄白らが苦心惨胆して蘭文解釈（翻訳術）を行って解体新書を公刊するや、大槻玄沢により和蘭文典が整い、あとは狂奔する怒濤の如く、日本の新知識ルネサンスは進んだ為に、日本は阿片戦争を免がれ、露西亜の侵略を免れて独立国となり得たのである。

まことに学問は大切であり知識は広く世界に求めなければならない。攘夷はいけない。

以上の学問の正道を、杉本先生は本書に説いた。杉本先生は本書で、先人の汗の滲み、汗の臭いを想起させる凄まじい一語一語にこめる蘭語とその邦訳を巡る努力の姿を、個人指導の情熱を篭めて、鼻の先に突きつけて教えて呉れている。

杉本先生の「解体新書の時代」すなわち貴いエネルギー合成時代の解説によって、面白い時代がより面白く書かれ、単に医学書という一分野を全く離れて、広く「学問にかける情熱の貴さ」がより一層啓示された。

杉本つとむ先生の情熱に感謝する。有難い本である。

（川島恂二）

〔早稲田大学出版部　定価二、〇〇〇円〕

蒲原宏監修『整骨・整形外科典籍大系』全十三巻

蒲原宏先生が監修する『整骨・整形外科典籍大系』全十三巻が、オリエント出版社から発刊された。第一巻から第十二巻までは、整形外科的文献（典籍）が集録され、第十三巻は詳細な解題となっている。

一巻、二巻は日本の正骨術、正骨書に大きな影響を与えた唐、宋、元、明、清等の中国文献である。この中には原典が中国ですでに散逸したものもある。

二巻から五巻は日本で著述された和本の正骨書である。

六巻はアンブロアズ・パレ外科書の影響を受けた紅夷外科宗伝と外科訓蒙図彙の全文、および星野良悦の木骨文献。

七巻から九巻は各務文献、奥田万里らの木骨と整骨書。ハイステル、ブレンク、セリウスらの翻訳書。

十巻から十二巻は繃帯書。ギプス繃帯書、四肢切断書等が収蔵されている。

十三巻は日本整形外科前史ないし通史とされるもので、監修者のきわめて懇切丁寧な解題篇である。この一巻を読めば日本整形外科史のほぼ全貌をうかがい知ることが出来、必要な部分については分冊を見ればよい。

私たち医史学を研究する者にとって、文献調査の重要性はいうまでもないが、正しい理解を得るためには、原典にまで溯らなければならない。しかも、これらの原典は日本全国に散らばり、国公立の図書館や私立、個人の書庫深くに蔵され、コピーは勿論、閲覧さえ困難なものが多い。

編者は永年に亘って、あらゆる困難を克服し、整形外科に関するきわめて広範囲な原典を追求し、原典ないし原典に最も近い写本等を復刻し、本大系の中に順序よく纏めて、私達に示された。私達は自分の書斎に居ながら、日本国中の文献に親しく接することができるのは、まことに有難いことである。

解題書に見られる通り、本書は原典を復刻しただけでなく、内容の解説、評価は勿論、当時の学問水準、原典著者の経歴や思考法等のバックグラウンドが記されている。参考文献を網羅し、巻末には整形外科前史略年表も付記してある。

以上のような理由から、本大系は整形外科史を知る上から貴重なばかりでなく、整形外科を標榜していない他科の研究者にとっても、きわめて興味深い重要参考文献である。

東大に整形外科講座が開設以来八〇年、日本整形外科学会創立以来六〇年、日本の各大学に整形外科教室が完備してから三〇年という様に整形外科の歴史はきわめて短いように感じられる。しかし、本書のように先史病理学や、律令、風土記、万葉集の記録に現われた骨関節疾患を取り上げて眺める場合には、整形外科の前史はきわめて古くて永いものである。もう一つの本書の特徴は柔術救急法や整骨科、柔道整復師の実績を評価して本書中にとり入れた編者の視野の広さによるものがある。

若し整形外科以外の他科においても本大系のような、各科別の典籍集大成が出現したならば、医史学研究者にとってひじょうな福音となるであろう。

三十五年間にわたって「天下無用に等しい研究」を黙々と足と全身で追求し続けた畏友蒲原宏先生と、御一家の協力が見事に実を結んで、本大系に集約されたことに対して、深い賛辞を呈する者である。

（大滝紀雄）

〔㈱オリエント出版社　定価一八〇、〇〇〇円〕

イサベル・R・プレッセト著　中井久夫・桝矢好弘訳

『野口英世』

本書は I.R. Plesset 著、Noguchi and His Patrons, 1981（野口と後援者たち）の全訳である。著者のプレセット女史（一九一二～一九八五）は精神科医の娘で、心理学を学び、理論物理学者と結婚、はじめ父の研究を手伝ったが、後に父の設立した病院の事務長となった。

夫君と来日したある時東京の野口記念館を訪ねた。夫人は野口に進行性脳麻痺の研究材料を提供した父から野口の話を聞かされて育ったので、野口の胸像に強い感動を受けた。この記念館訪問が本書執筆の契機ともなりまた訳者との繋りの糸口ともなった。

六十歳で事務長を引退した女史はその後の十年の全生活を資料蒐集と執筆にあてた。野口を直接知っている多数の人達や関連領域の研究者から聞取りを行い、また野口の上司でもあり庇護者でもあったフレクスナーの日記をはじめとして、ロックフェラー財団関係や各地の図書館などに残っている多数の文書類を蒐集した。更に女史は当時の病原微生物学がおかれていた状況や日本の歴史、文化についても調べて、野口への理解を深めた。

本書は多くの引用と綿密な考証にもとづいて書かれているが読者を全く退屈させない。これは、著者の筆力と野口の劇的な生涯とのためであろう。例として、野口の生涯の最初と最後のところを引用しておく。乳児期の火傷については、「勉強しない罰に母が自分の手をわざと火につっこんだ」という作り話を野口がニューヨークで親友にしたという、思いがけない話が紹介される。そして、黄熱で死んだあとヤングによって行われた解剖によって、「梅毒の陳旧感染とその意味する精神水準低下の証拠とは白日の下に曝された。ヤングは、この最後の屈辱から親友を守ってやることができないで（野口に続いて黄熱で）死んだのであった。」と結んでいる。

しかしこの伝記は野口という偶像を破壊しようとして書かれたものではない。むしろ本書の全体から野口に対する著者の傾倒と愛着とが感ぜられる。著者は「新たに使用可能となった資料をも含めて、大幅に異なるさまざまの野口観を、野口が生き、そして仕事をした、あの変動の時代の中にすえて吟味し理解しようとした」と述べている。その意味で本書は成功したものといえよう。

訳は非常に読み易い。訳者は著者プレセットの犯したいくつかの誤りを訂正しているが、歴史に明るい微生物学者に訳本の校閲を受けなかったことが惜しまれる。誤りの一つは章の題ともなっている『北里研究所』である。著者は伝染病研究所も、現在に続く北里研究所もおなじく『北里研究所』として扱っている。これが誤りだとの指摘がないし、また二木謙三がフタキ（二木?）として曖昧に残されている。二、三の訳語ももっと適切なものがあったであろう。

本書は自然科学者の伝記として非常に優れたものである。出来る限りありのままに描かれた野口の姿は、かつての偶像よりもはるかに魅力的である。そして晩年の十年間をこの伝記の完成に注

いだプレセット女史の執念と、それを可能にしたアメリカの資料保存の努力とには敬服せざるをえない。

（小高　健）

〔星和書店　一九八七年　四八一頁　定価三、九〇〇円〕

吉岡郁夫著『**日本人種論争の幕あけ**—モースと大森貝塚—』

著者は、愛知医大解剖学教授で、本学会の会員である。本書は、モース（Edward Slivester Morse, 1838～1925）と『大森介墟編』（明治一一　一八七八）を中心に、日本人種論をとり扱い、主として形質人類学の立場から、自らの考えを示したものである。構成は、序章「日本人はどこから来たか—日本人種論の変遷—」、第1章「大森貝塚の発見」、第2章「『大森介墟編』の刊行」、第3章「モースのプレアイヌ説」、第4章「プレアイヌ説をめぐる論争」、第5章「むすび—外国人による日本人種論—」、「モース略年譜」からなる。

序章で、日本人種論史が示され、第1章でモースの大森貝塚の発掘について検討し、モースの日本人種論とのかかわりは、大森貝塚の発見と発掘からであるとしている。第2章で『大森貝墟編』刊行の経緯と内容が述べられている。第3章でモースのプレアイヌ説が解説され、第4章では、ディキンス、ミルン、ヒッチコック、H・シーボルトとの論争を紹介している。第5章で、モースを中心に、外国人の日本人種論の日本人への影響、各学説の記紀の利用などを問題にしている。著者は、十二年間にわたり、文献を収集。原典を精読の上で、冷静に、客観的に、現代からでなく、当時の場に立って、検討を進め、単に、史実の解説のみでなく、自分の見方、考え方を示されている。医史学そのものではないが、周辺分野の研究を示されたものであり、ぜひ読まれることをすすめたい。

（矢部一郎）

〔共立出版　東京　一九八七年　B6判　一九〇頁　定価一、六〇〇円〕

加納喜光著『**中国医学の誕生**』

この書は著者自身の言によると「中国医学と中国思想とのかかわり、あるいは、中国医学思想のバックグラウンドを求めること」に主眼を置き、「中国医学史とか中国医学思想史といった通史の形をとらないで、いくつかの話題にしぼり、その論述のなかから、中国医学の一面が見えてくるかもしれない」という考えでまとめられている。

この書は五章から構成されている。第一章　薬王では戦国時代の伝説的な名医扁鵲にに関する説話について論じ、第二章　神医では華佗を取り上げてその医術が中国の伝統と異なるとしている。第三章　気は小野沢精一・福永光司・山井　湧編『気の思想』（一九七八年　東京大学出版会）に「医書に見える気論——中国

伝統医学における病気観」として収載された一篇に手を加えたものである。第四章　脳と心は精神のありかという観点から脳と五臓について論じ、第五章　怒りと病は古代の祝由と元の朱震亨の活套を中心にして中国の精神療法について述べている。

この五つのテーマは中国医学思想の根幹にかかわる問題を含んでいて、著者は随所に魅力ある説を提出している。例えば『史記』の扁鵲伝にインド医学の、華佗の医学にイランの影響を認めるなどである。中国医学思想の形成にインド医学が何らかの影響を与えているであろうということは多くの人によって考えられているが、具体的証拠に欠けるため、これまでは単なる漠然とした想像にしか過ぎなかった。著者は仏典中の耆婆の治療譚とかマスペコの戦国時代にインド文化との接触があったのではないかとする説に基づいて、戦国・秦の外科医とか俞跗の治療法にインド外科の影響乃至イラン・インドの幻術的要素が認められるとする。

中国医学の理解のために「医学作品にはこだわらず、広く当時の医学的な思想を抱括してとらえることにする」という方針で著者は中国だけでなく西洋の文献にまで目を向けて広い視野で眺め、この書を特色ある価値の高いものにまとめている。しかし、医学思想を最も豊富に蓄積しているのは何といっても医学古典そのものである。特に近年は馬王堆出土品のような、これまで見ることのできなかった医学思想形成過程の姿を残した資料も発見されているし、『素問』や『霊枢』といったいわゆる「黄帝内経」もそのなかにさまざまの説を包含していて、見方によれば、未整理ではあるが戦国から秦漢にかけての科学思想史といえないこともないことがわかってきた。この書は中国医学について或程度の知識を持っている人にとっては、さまざまな問題を提起してくれる有益な書である。しかし、一般の読者はこの書から中国医学思想の特徴を汲み取ろうと期待するであろうから、そのような人のためには既存の医学古典やそれらについての近年の研究結果にもう少し触れた方が誤解を生じさせず、より親切であったと思われる。

最後に書名であるが、私も内容に目を通すまでは、秦漢時代のことを扱った書かと思った。やはり著者のいうように「中国医学形成のプロセス」と読みかえる方がよいであろう。

（赤堀　昭）

〔東京大学出版会　B6判　三一〇頁　定価二、四〇〇円〕

望月洋子著『**ヘボンの生涯と日本語**』

『ヘボンの生涯と日本語』を読んで改めて感じたことは、ヘボンについての纏った著書は、高谷道男先生のものを除いて、殆どないということである。私の手元のヘボン関係書をみると、いずれも高谷先生著である。

牧野書店　ドクトル・ヘボン
吉川弘文館・人物叢書　ヘボン
岩波書店　ヘボン書簡集
有隣新書　ヘボンの手紙

右以外には

山本秀煌著　ゼー・シー・ヘボン博士
グリフィス著　日本のヘップバーン

があるが、後者は未だ日本語訳がない。

本書の扉写真三点は横浜開港資料館蔵だがこれも高谷先生寄贈品であり、いかに先生がヘボンの最高研究者であるかが知れる。

著者の望月さんはこれらの著書を基盤とし、幕末明治の幅広い資料研究を踏まえて、作家一流のするどい眼で、ヘボンの生活と日本語について語っている。

本書は生麦事件から始まる。一八四一年二十六歳のヘボンは小さい帆船に乗り、結婚したばかりのクララを伴ない、最初の東洋行きを試みる。シンガポールでのブラウンとの出合い、ギュツラフの『約翰（ヨハネ）福音之伝』との出合いはヘボンの生涯を決定づけた。またアモイ・コロンス島での施療は、のちの日本での施療の踏み石となった。

本書ではフェートン号事件、モリソン事件、阿片戦争、ヒュースケン暗殺、生麦事件から薩英戦争の終末までが要領よく纒められている。開国したばかりで攘夷論が横行する危険な日本へ乗り込んできたヘボンが、まず言葉の問題と取り組む姿勢が詳細に描写されている。日本語の先生はヤゴローと岸田吟香だけでなく、ヘボンを取り巻くすべての日本人であった。彼一流の不屈な努力と鋭い勘で、メモ式ノートは次々に埋まって行く。

日本語のむずかしさ、複雑さ。同じ漢字を使いながら、日本語と中国語の構造が全く違う。主語と目的語の順序はむしろ英語と中国語が似ている。日本人には何でもない助詞のテニオハや、かな交り文が欧米人にはどんなに理解が困難であるか、話し言葉と書き言葉の違う日本語。せめて、わざわざ、いまさら、いっそ、そわそわ、じりじり、せっかく等等、情緒的ないい廻しの多い日本語。これらを語彙ノートに記録し『和英語林集成』の出来上る過程を筆者は克明に分析し書き現わしている。私も復刻第三版『和英語林集成』を書庫から取り出し、本書一三八頁の初版本と比較してみたが、何と相違のあることだろう。ヘボンの努力のあとを知ると同時に、望月さんが「手作りの器みたいにのみやたがねの跡が見えそうな辞書」との評がぴったりだ。本書によりヘボンの言語学者ないし文学者としての評価はさらに上るだろう。言語学者である著者の御主人、渡辺実氏の協力の跡が偲ばれる。

書評を書いている最中に、ニューヨークから一通の手紙が届いた。七月十七日オレンジ市長出席の下にヘボン先生顕彰碑除幕式が盛大に挙行されたことが記されていた。

ヘボンに関心のあるなしに拘らず、本書の精続を強くおすすめする。

（大滝紀雄）

〔新潮選書　新潮社　定価八三〇円〕

丸山敏秋著『鍼灸古典入門』

八年前に山田慶児氏が「黄帝内経の成立」を思想誌に発表され、小生はその基本的な方法のいくつかに反論したことがある。偶々

時を同じくして丸山敏秋氏が山田氏に対する批判をも兼ねた「黄帝と医学—黄帝内経の成立事情をめぐって」（日本医史学雑誌二十六巻四号）を発表され、以来、同氏の研究に注目してきた。

その後、内経に関わる幾つもの基本問題についての気鋭な論を展開されたうえ、昭和六十年には龍伯堅著「黄帝内経概論」（東洋学術出版社刊）を訳出された。これも、ほぼ同時期に中国語勉強会のテキストに採って、訳出しようとしていた矢先に同氏が既に訳了していたことを知り断念した経緯があった。

更に氏は昨年「気—論語からニューサイエンスまで」（東京美術刊）を上梓されたが、これも亦、偶然であろうか、同年十一月の日本漢方協会学術総会で小生が「内経における〝気〟概念」を発表し、とくにその思想史的な背景を明らかにしようとしていたことと軌を一にしていた。

ここまで来ると、丸山氏が次に扱うテーマが奈辺にあるかに期待が掛ってくる。

この六～七年、鍼灸学生に薦め得る鍼灸医学史と鍼灸古典解説書が欲しいと痛感していた。果して恰好な本書が出版された次第である。

本書は第一部・鍼灸医学史略、第二部・代表的鍼灸古典の概説から成っている。

第一部は中国篇と日本篇に分け、それぞれ近代までの史的発展の特質を明らかにしながら、大筋がつかめるようにまとまっている。著書の性質から、第二部の代表的古典への導入のために書かれたものであるが、日本では未だに鍼灸医学史がまとめられていないことを考えれば、良い素材を提供された。

第二部では代表的鍼灸古典として次の十一書が挙げられている。

馬王堆出土脉書、黄帝内経、難経、甲乙経、太素、明堂経、銅人腧穴鍼灸図経、鍼灸聚英、杉山流三部書、鍼灸則、鍼灸説約。

この中でとくに「馬王堆出土〝脉書〟」と「明堂経」を代表的古典に選ばれたのは、著者の鍼灸医学史観からの主張であり、高い識見というべきであろう。就中、「明堂経」は経穴学の原典でありながら、その一部が仁和寺に伝わるのみで、その全貌は未だ明らかになっていないが、著者が代表的古典に位置づけたことにより、今後その研究が急速に進展することが期待される。

我が国の鍼灸臨床家は臨床体験を経ない古典研究を否定する傾向が強い。しかしそれは誤っていると思う。古典研究は今、専門的研究者なしには十全を望み得ない。丸山氏は「宇宙と人間をまるごと包含した新しいコスモロジーの再興が叫ばれている」（前掲「気」）立場から「鍼灸医学の発展を真摯に思う者にとって、古典を欠くことはできない」（本書・あとがき）として本書を著わされている。全面的に賛意を表したい。ただそのために敢えて苦言を呈すれば、例えば本書中に素問中の脉診を三部九候診・人迎脉口診・六部定位診と規定するのは、難経脉診の原型をも含めて如何であろうか。現状に泥まれないことを願っておきたい。

（島田隆司）

〔思文閣出版　一九八七年　A五判　二一四頁　二、八〇〇円〕

梶原性全著『頓医抄』・『万安方』

いうまでもなく、両書ともに梶原性全の著で、日本中世最大の医学全書として評価される名著である。

『頓医抄』は全五〇巻。嘉元元（一三〇三）年成。病門は主として隋の『諸病源候論』によって分かち、治法は『千金方』など旧来の方を受け継ぐとともに、当時新渡来の宋の医学全書『太平聖恵方』をすみやかに吸収し、しかも和文に改め、民衆の救療に役立つようはかってある。自己の経験による記述も多い。巻四十三・四十四には侏書『存真環中図』からの引用とみられる彩色の内臓図が収められており、解剖学史上からも注目される。『頓医抄』にはいく種かの伝本が知られるが、本書所収本には、そのうち最善本の一つと目される国立公文書館所蔵の室町鈔本（市野迷庵旧蔵・狩谷棭斎手題・多紀元堅手跋）が用いられている。

『万安方』は全六二巻。正和四（一三一五）年成。『頓医抄』が和文で書かれているのに対し、本書は家学を子孫に伝える目的で漢文で記されている。さらに本書は『太平聖恵方』の後に編纂された中国の医学全書『聖済総録』をいち早く取り入れているのが特徴。性全の新文化吸収に傾けるあくなき情熱をうかがわせる鎌倉時代最大の医書である。伝本は江戸初期の岡本玄治献上本を唯一基とし、本書にはこの国立公文書館所蔵の原本が収めてある。

「梶原性全の生涯とその著書」についてはかつて本誌（六巻二号・四号）に石原 明氏の詳細なる論考があり、本書『万安方』の末尾に転載されている。

筆者の調査によれば、とくに『万安方』は、たとえば『養性必用方』『究源方』『可用方』などをはじめとする中国宋代の佚亡書の内要をうかがう上での貴重な資料であり、あるいは当時の日本における渡来医書の実情を示すかけがえのない史料といえる。

日本中世医学史上に大きな足跡を遺し、やがて興る日本近世の医学に影響を及ぼしたこの『頓医抄』『万安方』の二書であるが、余りに大部であったためか、江戸時代を通じて一度も版に付されたことはなかった。また明治後も今日に至るまで出版をみたことはない。

このような事情から、特殊図書館に存在することは知られてはいても、複写に要する繁雑な手続きと、多額の費用からして、従来一般の研究者の容易に利用できる文献ではなかった。ちなみに筆者の所属する研究所では、十年近く前に同内閣文庫の両書のマイクロフィルムを印画して架蔵しているが、全二六冊に製本された厚さは何と一メートルに達し、また二五〇、〇〇〇円という金額を費している。

両書が成立七百年にしてはじめて刊行をみたことは、まさに記念すべきことであり、しかも各一冊に縮印され手もとに備えることができるよう配慮された本書は斯界の研究者を大いに裨益するものと思われる。

これを機に、『頓医抄』『万安方』の研究が一層進展することを期待したい。

（小曽戸 洋）

〔科学書院影印　一九八六年　頒医抄・七五八頁　万安方・一、七五二頁　揃二冊定価六〇、〇〇〇円〕

（矢部一郎）

日本薬局方百年史編集委員会編『日本薬局方百年史』

〔日本公定書協会　東京　一九八七年　B5判　三九五頁　頒布価格五、〇〇〇円〕

明治一九年に、日本薬局方（第一版）が公布され、昨年百周年を迎えた。本書は、その記念事業として、編集刊行された。本書の構成は第Ⅰ部、第Ⅱ部、資料、寄稿及び年表からなる。第Ⅰ部は、序章で、日本薬局方制定前史、第1章から第4章にかけて、日本薬局方百年の歴史が叙述されている。第Ⅱ部は、行政、試験法、製剤総則及び生薬についての推移変遷、外国薬局方のあゆみ（年表）が示されている。資料は、組織及び委員、附表、収載品目の変遷についてである。寄稿は、日本薬局方の調査審議に当られた人たちによる寄稿（思い出）である。年表は、明治四（一八七一）年から昭和六一（一八四六）年にかけて、薬局方を中心とした年表である。本書編集の特徴は、「編集綱領」にある。一、組織による事業推進の事業に鑑み、重点をこの史実に置き、個人の業績、礼賛の記述は必要最小限に止めること、二、史実は文献に基づき客観的に捉えた記述とすること、三、記述には、憶測、仮定、推量などは避けること。

編集委員には、本学会員が参加しており、宗田一氏が副委員長、青木允夫氏が委員である。『日本薬学会百年史年表』（日本薬学会、一九八〇）とともに、貴重な史料である。

『北陸英学史研究』第一輯

日本英学史学会は、医史学会の会員も参加されている学会であるが、昭和五六年から北陸支部ができ、研究発表会を毎年開いてきている。本誌は、その機関誌としての第一輯である。収載されている論稿を紹介する。

「維新外論」考—グリフィス論文 The Recent Revolution in Japan の翻訳から—（山下英一）、「広益英倭字典」をめぐって（山森青硯）、加賀の英・仏学事始とその展開（今井一良）、加賀洋学関係年表（今井一良）、加賀洋方医学関係年表（津田進三）、「ドドネウス」と「アタラス・ノウヘアウ」（藤井信英）、加賀洋学資料—蘭学から英学へ—（藤井信英）

山下論文は、明治に来日した米国人 W.E. Griffis (1843～1928) の論文について、山森論文は、金沢で出版された英和辞典についての論文である。今井論文は、加賀の洋学と洋学教育を知る上で重要であり、今井・津田の年表は、それをさらに幅広く知る手掛りとなる。藤井論文は、加賀藩旧蔵のドドネウス『草木誌』とサンソン『地図書』についてのものである。本誌で、最も重要なものは、「加賀洋学資料」である。現存する洋学資料目録で、現所蔵

者名も示され、利用に便となっている。洋学史にとって、大変貴重なものである。

本誌についての問合せは、〒九二九―〇三 石川県河北郡津幡町加賀爪ワ―26 今井一良方 日本英学史学会北陸支部 電話〇四六二―八九―二八七九。

（矢部一郎）

〔日本英学史学会北陸支部 石川県 一九八七年二月 B4判 一七九頁〕

杉浦守邦著『日本最初の肢体不自由児学校柏学園と柏倉松蔵』

日本における障害児に対する教育は、戦後になってようやく整備されるに至ったが、明治以降、教育の近代化の中で、公教育としてはかえりみられることがきわめて少なかった。そうした中で、民間の手によって柏学園が設立されたのは大正十年のことであった。設立者、柏倉松蔵は四十一年に亘って柏学園日誌を誌し、これを中心に、山形大学教授、杉浦守邦氏によって、この歴史がまとめられた。六百頁に及ぶ労作である。

「どこの学校へ行っても、体操の時間になると、足や手の不自由な子供がきっと一人や二人はいて、運動場の隅にしょんぼりしていることでした。私は、その不幸な子供たちの淋しい姿が、元気に体操する子供たちと対照して余りにも傷々しく胸に刻みつけられて忘れられなかったのです。」

と柏倉松蔵はその著『肢体不自由児の治療と家庭及学校』（昭和三十一年）の中に、障害児の体育についての関心が、教師の良心として生じたことを述べ、この学園設立の動機をうかがわせている。

柏倉は、明治三十六年、日本体育大学の前身である日本体育会体操学校を卒業し、東京市阪本小学校代用教員をふり出しに、教員として経歴を重ね、明治四十一年、岡山県師範学校教諭となっている。この時代の体育は「丈夫な兵隊を作ることを最終目標としたものであって、障害を持つもの、従って兵隊として役立たないようなものについては、全く念頭におかないものであった。」と著者が述べる状況の中で、柏倉は前述のような障害児に心をむけ「あの不幸な子どもたちを、あのまま放っておいてはいけない、何とかしてやらなければということが常に胸の中にあったのでした。……」

と彼の生涯をその方向にすすめていることになる。彼こそ「障害児の体育について考える最初の体育専門家であったといえる」と著者はみる。そして戦前に高い水準の障害児教育を発展させた彼への評価と、柏学園の歴史を明らかにすることの意義を認め、この研究をすすめられた。

本著は第一部として、柏倉松蔵及び協力した妻とく、さらに指導・助言・共同経営者であった東京帝国大学教授田代義徳の三名の人物について述べる。とくは小学校の教員で、明治四十一年松蔵と結婚、夫婦の協力で学園は経営された。また田代は東京帝国大学の卒業で外科教室で学び、ドイツ、オーストリーに学び、初

代の整形外科学講座を担当した。肢体不自由児に対する治療と教育の必要性について啓蒙宣伝し、実践した人物である。これら柏学園を設立し、発展させた主要な人物について紹介している。

以下、学園について経営主体からは三期に大別されるが、その第一期たる私立学校兼社会事業施設としての柏学園に重点をおき、時代区分を次の四期にわけて述べている。

第一期　草創期（大正十年五月の開設から昭和二年三月まで）
大塚・高円寺の仮園舎で治療と教育を手さぐりで行なった時代

第二期　基礎確立期（昭和二年四月から七月まで）
自前の園舎を建設し、本格的事業を展開して、初めて卒業生を送り出すまでに至った時代

第三期　発展充実期（昭和八年四月から十四年三月まで）
園舎の増築、職業実習園の確保、訓導の増員、高等科の開設など事業の最も拡大した時代

第四期　戦時萎靡期（昭和十四年四月から昭和二十一年度末まで）
戦争の勃発激化によって次々と園児を疎開させ、ついに閉鎖の止むなきに至るまでの時代

以上を主な内容として詳述され、松蔵の残した日誌、学園の資料、写真等が豊富におさめられている。

この本が出版されたこととの意義はきわめて大きい。まず第一に、柏学園の創立のころとくらべれば、たしかに現状の障害児に対する教育、医療、福祉は充実してきている。しかし、その内容をみるとき、果して柏学園がめざした教育と医療を統合したものになっているかといえば必ずしもそうとはいえない。福祉が一つの専門領域を形成し、療育内容が教育あるいは医療のいずれかにウェイトがおかれ、他方は副次的になる施設も少なくない。現在においても、本著にしめされた柏学園の療育の理念は検討され、教訓とすべきものを含んでいるといえよう。

第二に著者がきわめて忠実に原資料を年度別に掲示されたことから、これから発展するであろう肢体不自由児教育、福祉研究の研究者たちにとって、資料として多くのものを提供するものとなった。杉浦氏は本著が「肢体不自由児の保護救済問題をめぐる社会事業史であり、福祉行政史であり、また教育史であり、さらに民間活動史ともいうべきものになった」と位置づけておられるが、まさにその通りである。今後、これを追う研究が発展することが期待される。

最後に杉浦守邦氏のこの研究によせられた情熱とその労を多とし、心より敬意を表したい。

（木下　安子）
〔山形県特殊教育史研究会〕

谷津三雄著『医歯薬史資料図鑑』

著者は昭和五十一年に『歯学史資料図鑑』を発行しているが、この本は歯科・口腔外科・麻酔の歴史資料を主とした内容となっ

ている。この度出版した『医歯薬史資料図鑑』はこの続編ともいえるものであるが、本書は歯科だけでなく、医科・薬科の歴史に関する資料も豊富に載せていて、前書より多彩な内容となっている。

収録されている資料は、薬看板・薬袋・薬研・薬匙・薬篩（くすりぶるい）・秤・百味箪笥・薬鑵・薬籠・眼鏡・お歯黒道具・お歯黒をした義歯・売薬の薬袋と薬箱・印籠・鍼・陸軍歯科嚢・明治期の注射器・江戸時代の水筒と水飲み・明治時代の聴診器・第二次世界大戦の野戦病院使用外科器械と患者運搬車・米軍払い下げの包帯などがあり、貴重な品々が多い。特に日常使い捨てられている小楊枝とその包装が明治から昭和まで収録されているが、これ程沢山の小楊枝蒐集も珍しいのではないだろうか。

これらの品物以外に、医療に関する錦絵・歯科の広告・赤十字社関係の石版画と錦絵・麻疹（はしか）絵・明治大正期の家庭薬の広告・歯磨きの広告などがあり、医歯薬史だけでなく、風俗史的にも重要な資料が豊富である。

本書では、内容を三十六章に分け、各章の初めに解説を記して各項目を理解する助けとしている。また各資料の一つ一つに資料のタイトルと年代が付され、必要と思われる資料には数行の解説がされている。特に著者が歯学史に造詣が深いため、「お歯黒考」「歯磨きのラベルと引札」「義歯の原点は日本」「歯科に関する器具と広告」など歯学史関係の資料についての解説は丁寧である。

だが、「明治末期頃から大正にかけての医薬（家庭薬）の広告」と「売薬許可証」について解説がないのが残念である。また「歯科医学に関する切手」の章では、著者所蔵の珍しい切手が載っているが、医歯薬と関係なさそうな「商船教育一一〇年記念」「第五十二回国際図書館連盟東京大会記念」「天皇陛下御在位六十年記念」の切手を掲載した意図がわからない。この点に関する簡単な説明が必要だったのではないだろうか。

さきの『歯学史資料図鑑』ではカラーが三十一図で、他の五二〇図余はモノクロであるため、歯磨きのポスターや引札などの色が判らず残念に思っていたが、本書ではモノクロが少なく、大部分が美しいカラー図版であるため、看板や薬袋・引札などの色が判り、資料図鑑としての価値を高めている。

何気なく捨てられていく医療ポスターや薬袋、宣伝用ビラがやがては貴重な歴史資料となることを本書は教えてくれる。本書を見て、多くの人が医歯薬史資料保存の重要さを認識し、保存運動の機運を高めてくれることを切望する。

（蔵方　宏昌）

〔医歯薬出版　一九八七年　A4判　三六二頁　二八、〇〇〇円〕